

フィールドノート「アチェ国際ワークショップ記録」

期間：2011年12月21日～26日、バンダアチェ市（インドネシア）

柳澤 雅之

◆2011年12月20日(火)

4:00 起床。朝日がでてから蒸し暑くなりスコールがくる。

10:00 ホテルのシャトルバスでジャカルタの国際空港へ。ホテル前から渋滞しているがゆっくりとは進んだ。空港でSIMカードと通話料プリペイドカードを購入。西さんによるとSIMカードは2か月ほどで期限が切れるので渡航のたびに購入するとのこと。私のSIMも登録できないとでて使えない。携帯電話の店は空港内に数カ所ある。荷物受取場所近くに1ヶ所。1階に2か所。とくにイミグレからでて左側にいったところにある店は親切だった。

英語がわかり、登録からカードの設定もしてくれる。そのまま使えるようになる。国内線のgateで林さん、星川さん、ジュリアンさん、深田さんと合流。バンダアチェに向かう。

14:15 飛行機がメダンに向けて降下。上空は雲。森はない。川沿いの砂洲にアブラヤシ(OP)のプランテーション。村は塊村。短冊状の農地(タイのランシットのような農地)があり。やがて長い直線の水路あり。水路沿いに家が立地。細長い水田・畑あり。整然とした農地。小面積のOPがあり、生育ステージが異なる。小農によるOP農園のよう。緩傾斜面の土は茶色。道沿いに家あり。道と並行して川あり。それと垂直に小区画水田が整然と並ぶ。開拓村。数十年はたっている。屋根が茶色に見えるのはトタン屋根がさびているためのよう。土地利用はステージの異なるOPが多い。畑も混在。畑ではトウモロコシ(?)が栽培。広い面積で栽培。火山灰が降り積もっている緩傾斜地でトウモロコシが卓越し

ているのかもしれない。また町の北部には圃場整備された大区画の土地がある。畑のある様子。

14:30 メダン着。Transit。見る範囲はココヤシ多い。大きな村のよう。中心部のわずかなところをのぞき、高いビルは見えない。メダンの空港で40分待たされる。



飛行機から見たメダン

16:30 バンダアチェ空港着。飛行機が一機もなくただっ広い。周囲にはココヤシと水田の村。メダンが開拓村的な景観であるのに対し、バンダアチェは古くからの村の様子。

空港から市中心部へ行く途中では、水田多数。村が島のようになり、集落はココヤシや

多数の果樹でおおわれている。島の間は低地で水田が広がり、現在、耕起あるいは移植準備中。まもなく移植。苗高25cm。海岸線に並行するように砂洲が発達し、海岸沿いの村は砂洲の上に発達している。集落の周辺にはランブータン(今が収穫のシーズン)、マンゴー(ほとんど実はない)、ココヤシ(高さ15m)、バナナ、フトモモ(実ができています)、ジャックフルーツ、パパイヤなど果樹が多数あり。

16:50 川幅50mほどの川を渡る。河岸でサトウキ



バンダアチェ近郊の水田と村

ビ。ヤギがときどき道を横切る。ドリアンを販売。長径25cmほどのこぶりのドリアン。数日後屋台でドリアンを食べる。川の右岸を上流へ。

16:59 橋を渡り左岸へ。

16:03 Hermes Palace Hotel着。州庁舎に近い。

18:00 先発していた山本さん・西さんにホテルロビーで合流。打ち合わせをしていたとのこと。そのままバンダアチェで一番おいしいという店に行き夕食。Imperial Kitchen。2004年12月26日(午前8時少し前)の地震とその後の津波災害ののちにできた店。復興援助関係の外国人がきてwifiをしながら食事をしていた。ビールを出してくれる。現在は外国人の姿は少ない。山本さんによるとバンダアチェの金持ちだけがいけるような高級店というのはないとのこと。そういえばポンティアナックでも高級店というのはなかった。

20:30 就寝

◆2011年12月21日(水)

4:30 起床

朝食で浜元さん親子にあう。風花ちゃん(1歳)。インドネシアの託児所事情について話。2005/06年から教育が自由化し、さまざまな教育ルートが可能になった。この時、さまざまな託児所が発展。浜元さんがジョクジャカルタで預けているところは、午前6:30~午後5:00まで。食事と2回のおやつつき。託児所建物は列車を改造したもの。毎月、爪切り、耳掃除、3か月ごとに歯科検診あり。しつけにも厳しい。いたれりつくせり。共働き夫婦が多いことと、教育熱が高いことがこうした託児所を発展させた理由とのこと。

Hermes Palaceホテルで初日のワークショップ開始

- 日本の人がアチェのために泣いてくれたことに感謝
- リモセン分野で制度の良い衛星画像の入手・利用でCIASと協力したい
- Disaster Risk Management Information Systemは防災マップのオンライン版。
- Hazard mapとVulnerable mapの組み合わせで防災マップをつくる
- 多様な側面から災害に対応したい。ワークショップの中で何度か出たのは、災害は多様であること。地震津波だけでなく、また地域も広い。さらに大きな災害だけでなくごく小さいために新聞にのらないような災害もある。
- 災害対応はmultidisciplinaryな分野。TDMRCもできたばかりでMultidisciplinaryな授業を考えているがまだ寄せ集め状態。今後の課題。
- 地域の知も興味深い。津波に関する地域の知がある。詠唱の詩が親から子への伝達の重要な手段になって

いることがある。津波の記憶を伝達できるかもしれない。そうした地域の知(kearifan lokalローカルの知識)を掘り起こし世界に発信したい。

15:10 ホテルを出発

15:15 州庁舎、ペンは剣より強し塔などを通過

15:23 文書館。その裏にTsunami Archive Centerあり。復興再建にかかわる文書62,000箱(一辺25cm、長辺30cmほどの段ボールボックス)あり。アチェ・ニース復興庁の文書資料を保管。2005年4月に復興庁ができ、2009年に消滅するまでの資料。内容は、住宅・道路・学校再建に関する資料。復興のプロセスでは、復興を優先させたため(中央か地方かといった)従来の管轄とは関係なく援助等の資金を復興にあてた。ただし公文書はすべて保管するきまりになっている。復興庁の資料はとくに復興時の混乱の中で作成されたものであり保管しておく必要性が高い。復興のために使われた建物やインフラなどの資金源がどこかをはっきりさせる必要がでてくるかもしれないから。なお津波そのものの被害に関する資料は津波博物館に集められている。

ここに文書が集められて1年が経過した。現在、デジタル化を進めているがほとんどが未整備。人手も資金も不足。

スタッフ数は常勤9名(アーキビスト3名)、非常勤10名、他機関からの出向5名。

この建物の2階から6階に保管。すべての文書が登録完了したわけではない。来年以降新しい建物に移したい。空港近くに新しい建物をたて一か所に集中させたい。津波時はこのあたりは1階の天井近くまで水がきた。1階にあった文書は被災後ほったらかしにされカビが生えて使えなくなった。

●訪問後の西さんとの話

文書館の役割はそもそも公文書を残すこと。ここも基本的には同様だが、復興庁という特別の資料を残すことになっただけ。復興に関連する資料が特に必要とされていて現在問題になっているから文書を残すというわけではなさそう。

15:58 文書館を出発

16:15 インドネシア赤十字アチェ支部(PMIアチェ)に到着

PMI: Palang Merah Indonesia
IFRC Service Compound Office
Jl. Ajun Ache Jeumpet No.18B, Darul Imarah,
Ache Besar
Tel: +62-651-7551001
代表 Mr. Ir. Teuku Alaidinsyah、アンワル(渉外)、
アヒップ(事務局)、ラジャリ、パケ(リエゾン)

- インドネシア赤十字(PMI)は1945年設立。全土で33支部あり。アチェ支部は1970年設立。アチェ州に23ブランチあり。
- スタッフ数は、この支部で35名。うちアチェ人は95%。それ以外にボランティアがいる。小・中・高の生徒によるボランティア(RMR)が1624名、大学生によるボランティア(KSR)が1050名、社会人による専門のボランティア(TSR)が553名。他にボードメンバー。紛争の時代にはスタッフ数2名。ボランティアは安全な2〜3郡に十名ずつ程度。当時活動ができたのはバンダアチェ、アチェブサール(大アチェ県)、サバンなどに限定。ほとんどすべてのボランティアはアチェ人(他の民族と結婚しているケースはある)。州内の郡の数は、紛争の時代が17、現在は23。
- 政府のアシスト。現在の目的はorganizational capacityの強化、community baseの活動強化。
- アチェでのPMIの活動は3つの時期に区分できる。

1. 1976〜2005年：コンフリ

クトの時代。当時は紛争のせいで地方に行くことが困難。援助団体も赤十字以外には入っていなかった。紛争で負傷者が発生すると赤十字が運搬していた。赤十字は武器を携帯することができない。軍人にいじめられることあり。ジャカルタ本部を通じて



インドネシア赤十字アチェ支部の活動を示した地図

軍に活動を認めてもらうよう働きかけていた。

2. 2004年12月26日〜2005年：地震・津波からの復興の時代。40カ国からの援助を受けた。赤十字のボランティア数は6000名。他の地域の赤十字から応援にやってきた。2004年の津波直後、アチェにやってきた各国の赤十字の代表がタスクフォースミーティングを行って、地域ごとに各国の赤十字をわりあてなど各国の赤十字の活動を分担した。復興のための活動はアチェ・ニース復興庁(BRR)が策定。インドネシア赤十字はそれに従う。復興の終了もBRRの指示に従う。現在、復興は終了しドナーがなくなった。被災者の社会的支援は、トルコ赤十字が相談センター(アチェ・コミュニティセンター)を開設して行う。他に語学学校もあり。資金のないなかでボランティアの活動を維持することが課題。
3. 2005年〜2011年：Integrated Community Based Disaster Reduction(ICBDR)の時代。コミュニティはおもにdesaを単位とする。さまざまな国の赤十字がアチェ全体で活動をしている。ICBRD

の対象となった村は335村(全体の5%)。

赤十字には赤十字連盟がある。各国の赤十字の活動はこの連盟が指示を出す。アチェ支部がジャカルタ本部に対し活動要請を行い認めてもらう。献血やその他の活動を行っている。災害対策局が政府にでき、政府による災害救援をサポートする。

保管庫Warehouse見学。Family kitが2000箱あり。中身はバケツ、サロン、洗剤、石鹸、懐中電灯などの生活用品。他に、テント、つるはし、手回しサイレン、タイヤ、急病人搬送具など。

- 2009年10年頃からドナーによる資金援助が急減。

●訪問後の山本さんとの話

津波直後に各国から援助団体がやってきたとき、インドネシアでの活動を受け入れてくれるカウンターパートを探す必要があり、各国赤十字はインドネシア赤十字がカウンターパートになったが、他の援助団体はカウンターパートを自前で探さなければならず苦労した。山本さんらは、日本赤十字にアチェ復興

支援のための大きな資金が集まったと聞いて、復興支援策のアイデアを伝えに行ったが、採用されなかったという。現在、インドネシア政府としては、復興は終了したと公式に判断しており、援助による資金の還流が停まった。そのためアチェの災害復興関連の機関(シアクアラ大学津波防災研究センター

TDMRC、インドネシア赤十字、文書館、政府関係機関＝州議会、観光局・環境局などの役所)が横のつながりを強化し、活動資金を確保し活動を継続するために動いているようです。

18時頃直接食事に行く。アチェ料理。25cmほどの焼いた車エビ。店のつくりや料理は他のインドネシア料理に似ている。帰りにドリアンを屋台で食べる。ドリアンは3万Rp/個。長径25cmほどの少しこぶりのドリアンで、熟れているものは甘くておいしい。アチェ内陸部でとれたものだとのこと。

◆2011年12月22日(木)

8:30 ホテル発。快晴。

9:20 津波博物館でワークショップ開始。アチェ州知事(代理)が出席。コーラン詠唱からはじまる。

●TDMRCセンター長ディルハムシャー先生挨拶(会の準備状況を報告する)、アチェ州知事挨拶(開会を宣言)等情報の重要性。災害発生時に失われた情報の収集。復興時に必要な情報。学術研究と実社会の双方に必要

な情報を伝える。情報そのものに意味はない。使う人の主体性が情報を活かすことができる。アチェの情報発信することで、世界にアチェの経験を伝え世界に貢献することができる。

●ディルハムシャー先生プレゼン

Data:事実そのもの、Information:事実に位置づけたもの、Knowledge:事実・情報を解釈したもの。津波後の復興・再建を経てcreativeの時代に入った。さまざまな地域の経験を知ることが重要。災害とともに暮らすアチェのひとつの道。

SMONGという詩あり。シムル島。1907年の津波被害の経験が現在まで伝えられることで2004年スマトラ沖大地震・津波時に被害なし。神戸の防災博物館に日本語訳あり。こういう在来知識が有効であった例で収集されているのは2~3のみ。しかし実際にはもっとあると思われる。収集したい。TDMRCを中心として防災分野の南南協力になればよいと考える。

●Q&A 環境局の人

- 本日の話はバンダアチェ市が中心だが、周辺では村そのものが全滅したケースもある。バンダアチェ以外を含む広域でも考えてほしい。
- 地域の知の中には、詩だけでなく、社会関係に埋め込まれたものもある。そうしたもので含めてみてほしい。



家の上に船が乗った

その他発表あり。

●Husainiさん

アチェでの防災教育。すべての災害を対象。社会災害を含む。10県×6学校×4人=1440人が対象。寺田さん:体験を次世代にどのように継承するのか。とくにNegativeな記録・記憶を博物館でどのように展示す継承するのか。2011年3月11日以前に津波博物館は日本では2つしかなかった。

●Rahmadhani(州環境局、隣に座っていた若い人、のちの記念セレモニーの会場でも会った)

被害を商売の道具にはしないが、学びの素材にはしたい。アチェの現在が学ぶべき素材。被災した建物を見せるのではなく、それにまつわる話、復興へのプロセスを見せたい。

●浜元さん

日本と異なりインドネシアでは自然災害も観光になることをジョクジャカルタの例で示す。ムラピ山の例。有名な火山守が安全を2006年に宣言したが、2010年噴火。火山守は死亡し、その住居跡が博物館化した。また被災者住宅が半球型の独特な形状であ

り、これも観光資源となった。他に、Tシャツ、マグカップ、アクセサリ、ツアーもあり。被災は神からの試練だけではなく、祝福の側面もある。同情や関心、愛情を得る機会になるから。絶望する必要はない。10年前から、地方分権化の中で「観光村」が促進される。村落の資源を売り、観光を促進する法律。文化観光局。他に、学生の必須学外奉仕活動の中に被災地支援が含まれるようになった。

●Q&A 昨日のおじさん(観光局の小柄なおじさん、よく発言する)

アチェでは津波前後で人間関係が変わったように思う。家のづくりが大から小になり、それにとまって人間関係もかわった。かつてはめんどろをみる・みられるという関係だった。ジャワの例では?

ワークショップのプログラムは時間がほとんど守られず、このあたりで大幅に時間を超過。フロアから、お祈りの時間をいれてリフレッシュしてはどうかという意見がでる。お祈りをして心を静め集中力を高め

るという意見。

14:05 午前の部終了(予定を2時間オーバー)

昼食、津波博物館見学

15:30 津波博物館発

市内の被災地跡を見学。内陸まで運ばれた巨大電力船(大通りから入る道のところに被災後、しばらくして誰かがつくった金属の電力船模型が飾ってあ

る。電力船周辺に、ちょうど柵を建設中のため近くまで寄れない。全体が見渡せる小さい丘とその周辺が公園化され、被災者の写真等を展示)。また、家の上に乗った漁船を見学。ここも観光地化されていて、隣の店では記念グッズが売られている。

●Mr. アミルディン家

西さん、山本さんが定点調査している家。タイプライタープロジェクトでパーソナルストーリーを書いてもらう。

◆2011年12月23日(金)

8:00 ホテル発

8:25 Syiah Kuala大学着。Syiah Kualaはこの町の聖人の名。しかし、字の意味は、Syiahが王様や領主、Kualaが河口。河口を通じて海外の文物が入る。町の郊外がすべて大学の敷地。2004年の津波発生時、大学構内は大きな被害を受けていない。

大学構内にあるHyogo Prefecture Building。阪神淡路大震災を経験した兵庫県が、インド洋大津波援

助の一つとして建物を建設した。

州議会メンバーのMr. Adnan Beuransyahが参加。1990年インドネシア国軍につかまり、1998年まで刑務所生活。その後デンマークに出国。デンマークには1976年から亡命政府があった。2007年アチェ・インドネシアの和平合意の後、帰国。州としては経済発展に材木も考えている。ジャワあたりで行っているローテーションによる造林伐採に関心。



シアクアラ大学のHyogo Prefecture Building

9:40 Mr. Adnan BeuransyahによるOpening Address。アチェ（インドネシア？）の法律によれば、アチェ州が独自に世界各国と関係を結んでよいとされる。TDMRCは政府の複数機関と連携し、各国の関係機関とも関係を結ぶ中心になることを期待。

●原さん

2011年9月現在、世界で310億のデータベースがつながっている。データベースは標準型があってはじめて連携できる。現在は、メタデータをもとに、そのつながりを工夫することで、多くのデータベースをつなぐことが可能になる。

●Mr.Marwan Nusuf(アチェ州情報局)

情報普及のためのセクションのよう。外国からの支援に頼ることなく、まず自分たちで対応することを考える必要あり。

●Q&A

州議会議員に対し、アチェ州知事が森林伐採の許可を与えたのはなぜか。州では天然林の伐採は禁止。植林をすすめたい。スハルト時代に伐採権を州外の人に渡している。とくにアチェ州の西南部がそう。住民が森を焼くケースもある。州内のすべての伐採会社はアチェに拠点をおいてほしい。とくに南アチェでの伐採の問題は深刻で議会でも認識している。

11:35 山本報告

11:51 Nasaruddin報告

TDMRCで作成中の災害軽減データベース
昼食

14:30 雨のせいでお祈りに出かけた人の帰りがおくれ、30分遅れて午後の部が開始。

●林報告

誰でも使えるシンプルなデータベースがよい。シンプルな載せ方をすると、比較も可能になる。地域に特化させると複雑。

●Mr. Ridha(TDMRC副センター長)

防災学校をつくる。他は制度設計などの一般的な話。

●3人目

HPでの情報集積システム

●Irma報告

TDMRCが作成中の災害データベース。アチェで発生した1907年以降の大災害を収録。州と県のレベルで利用してほしい。デモを見ていないが、地図上に載せただけのよう。

●コンパス社ビベさんコメント

コンパス社ではOn line紙は1990年代後半から開始。当初

は別々の記者が記事を書いていた。アチェ津波時もそう。現在では統合。紙媒体の記事をon line版に掲載。記事に対するコメントを反映し、他の記事を書く。On lineで素早い情報発信と、情報入手が可能。Ex大統領の息子が遅刻したせいで飛行機が遅れたなど。またon line版での議論を見て社会情勢をしる。紙媒体は226人の記者、on line版は55人と16人のフリーランスから構成。

●Yarmen報告(アチェ州の地元紙スランビ社の記者)

津波でスランビの記者22名が死亡。津波によって新聞の活動が停止。コンパス社の記者が3か月にわたってアチェで取材し、記事とした。スランビ社の記者は、生き残った者でも家族が死亡したケースがあり記者としての活動ができなかった。スランビ社の2番目の印刷所が被害を免れた。

◆2011年12月24日(土)

5:00 起床

8:00 出発、Syiah Kuala大学へ

9:20 本日は20分遅れでワークショップ開始。

9:25 遠藤さん(JICA)挨拶

9:40 ●Syamsul Riza報告(シアクアラ大学)

大学は14学科。国内の教育制度が頻繁に変わるので、実態がかみあわない。社会人、とくに公務員を対象にした大学院を設置したい。各地の公務員は災害発生時に重要な人的資源となるから。公共事業省と連携し、災害が特に発生しやすい地域の公務員を対象としたい。しかし、大学で勉強後、仕事に戻れない可能性がある。1ヵ月くらいの集中講義をし、課題は自宅で実施。

●Q&A

津波被害後、シアクアラ大学はスマトラで2番目にランク。一番目は西スマトラのアンダラス大学。しかし、ジャワの大学にはなかなか追いつけない。TDMRCは理・農・医工・教育学部から人材を集めている。カリキュラムは試行錯誤中。2011年6月に初め

ての学生が入学した。

10:10 終了

11:23 西報告

●コメントby服部

フェイスブックがインドネシアでは盛ん。その中にwebページがあったりする。するとフェイスブックメンバーでないと閲覧できない。

アダットによる地図と行政の地図が異なる。西スマトラやアチェはアダットの地図が使えるとよい。

メンタルマップは個人の頭の中にある。子供と大人でメンタルマップが異なる。防災マップを作成するときに、事前に子どものメンタルマップを検証しておく必要がある。

12:00 Dr. Firdaus Daud(マカッサルから来た)

12:10

●Q&A

西さんの災害マップでは、入れる情報を選択せず、なんでもいれる。情報に優先順位をつけない。

●牧さん報告

警報だけでは人命を救えない。自分がどこにいるかを知ってはじめて逃げるべき場所がわ

かる。東日本大震災の時、市役所のサーバーは壊れたがツイッターは残った。自動車に携帯電話を通話状態にしたまま走行し、モニターすることで、どの道が通行可能かわかった。通常のニュースと異なる情報がでたときにそれをつたえるHPを立ち上げた。

17:00 TDMRCに移動、MOU締結セレモニー、写真撮影、Meeting。

●TDMRC

2006年設立。スタッフのうち70名ほどが日本への留学経験を持つ。主に工学部や農学部。副センター長も東工大。ほかに、豊橋科学技術大など。Multi-disciplinaryに対応したい。海岸近くの集団埋葬墓地の裏手にある。このあたりは25mまで津波がきた。現在、TDMRCは避難所になっている。屋上に200人避難可能。海岸沿いにほかに3カ所、400人規模の避難所が建設されている

●MOU時の柳澤コメント

地域研とTDMRCは設立の目的が異なる。TDMRC

は防災、地域研は地域研究。しかし、それぞれは、機関単独で事業を進めるのではなく、関係機関と連携して事業を進めるところが特徴であり共通点。そのネットワークを生かして提携すればよい。

●センター長ディルハムシャーさんのメッセージ

文書保存や防災教育に関心。

インドネシアではじめての防災関連の学際的なプログラムづくりに協力してほしい。外国での博士号を含め、教員派遣やトレーニングに協力してほしい。費用は両方で負担しながら進めたい。TDMRCが毎年開催している防災関連の学際的なフォーラムがあるので、そちらにもぜひ参加してほしい。

アチェ語で津波を意味する言葉はない。大きな水という意味のイブナという語はある。かつて2mほどの津波をイブナといったことはある。2004年以降、アチェ語から探してきた。

18:30 TDMRCは今回のワークショップ開催期間中にRISTEKからの訪問を受け、ここを防災研究の中心にするこ

とになった。今後、各国と協力関係を結ぶ予定。

19:00 終了。メンバーはあわててお祈りに行く。センター長のみ短くお祈りをすませ我々を見送ってくれる。

◆2011年12月25日(日)

9:25 ワークショップ最終日。TDMRCで開催し、オーディエンスも学校の先生らが中心。防災教育がワークショップのテーマ。

Munasri報告:LIPIの人。インドネシアの歌を歌わせるなどして進める。

11:30 ●西報告

外国からの文物の交換・翻訳の場がアチェであった。コショウ、金、天然ガスなどの自然資源だけでなく、アチェに来ることで、使いやすい知識が蓄積されており、それを求めて人が来る。情報発信は、



裏手(集団埋葬墓地)側から見たTDMRC。避難階段が見える



TDMRCの裏手にある病院。3階屋根の上まで水がきた



TDMRCの裏手にあるエビ養殖池

かつてはウラマー（宗教指導者）であり、内戦中は森の中のラジオ、現在はさまざまなメディアである。導入する力、翻訳する力、他の人にわかるように発信する力がある。今回のワークショップは新しい知をつくり発信する試み。

13:20 TDMRC出発。エクスカーションへ。

海岸沿いの道へ。海岸沿いでは植林されたマングローブが整然としている。高さ1mほど。シアクアラ聖人の墓地。かつてはガレキ置き場だったところ。いまは養殖池が多数。

13:45 シアクアラ聖人の墓地。弟子たちの墓標が流されたにもかかわらず、シアクアラ聖人の墓標のみ流されなかったもので、聖人としてさらにイメージがアップした。現在、新しい公園を建設中。

14:15 アチェの町の東側を流れる川を渡ってさらに東へ。新しい統計局、新しい刑務所あり。

14:45 ジャッキーチェン村。郊外にある復興住宅の一つで中国による援助のもの。入口に中国語の看板あり。およそ700世帯。ジャッキーチェン村は比較的貧しい人向けの復興住宅。ドライバーの青年がここに住んでいる。ドライバーは、2008年からここにいる。妻と二人暮らし。以前はタイプライターおじさんの家の近く。津波被災後に現在の妻と出会う。妻のほうは家族を津波で失う。そのため復興住宅に優先的に入居できる資格があった。復興住宅の端の高台に、低地を見下ろす場所あり。別の復興住宅や水田、養殖池、海まで遠望することができる。ジャカルタからきた中華系の旅行者親子もいて写真をとっていた。プラスチック製の椅子が備え付けである。

15:30 町中心部の復興住宅へ。台湾のツーチー教団による復興住宅。こちらは教育重視のため、子供のいる世帯を優先して割り当てる。緑を多く配置することを住民にもとめ、いろんな木々が植えられている。復興住宅の内部では、通りごとに同一の村のメン

バーで構成される。

西さん留学中に通っていたなじみのソバ屋さん。半汁ソバでおいしい。トウモロコシのコロッケやゆでたまご、酢漬けのシャロットをいれる。他に酒饅頭。酒粕を利用しているのではなく、酒饅頭のために発酵させているせいか、アルコール分が高いように感じる。いいのか。林さんによると、タイでも出来の悪い坊さんはたくさん酒饅頭を喰らうそうだ。

17:00 車でスランビ社（Serambi）へ。空港へ行く途中。

記者があつまり翌日の紙面を検討中。しばし待つ間、ラジオ放送室で遊ぶ。会議がおわり、ワークショップで発表してくれた記者と会談。15:45～

翌日の紙面づくりは、まず見出しを決め、記事を分担。7～8の記事を一面に配置し、残りを

テーマ別、地域別に配置。ゴシップ記事は2万部、一般記事は4.5万部を印刷。ラジオでも新聞記事の内容を流すが、概要のみ。詳しくは新聞を買ってもらうようにする。朝は、午前9:00～10:00の会議で記者に取材先を知らせる。ちなみに明日（12月26日（月））の記事はファッションショーやお祝いの記事など。

◆2011年12月26日（月）

8:20 ホテル発。街中でイスラム帽子を20万Rpで購入。山や水田の間を抜け、バンダアチェの北側にある海岸へ。水田は移植済1～2週間。水田の中に簡素な

出づくり小屋多数。鳥を追うため程度の小屋にも見える。村にはココヤシ15m、果樹（バナナ、パパイヤ）あるが種類は少な目。

9:00 セレモニー開始。今年は昨年よりも大規模で内容も濃いつのこ（ディルハムシャーさん）。テントの中の参加者席は男女が分かれる。これまでの式典は毎年異なる場所で開催された。今年はここAceh Besar（大アチェ県）。

コーランのお祈りや概要説明。日本大使館やマレーシアの名前がでる。



ジャッキー・チェン村の入り口



ジャッキー・チェン村から見た被災者用復興住宅



7周年記念セレモニーの来場者

9:50 コーラン詠唱終了。さらにコーラン。

10:04 準備委員長が準備報告を知事に行うという形式で報告。宮城県教育委員会(気仙沼)の人の挨拶。参加者500人のうち40人が日本人だそう。日本のNGOの団体も含む。ここは紙で作った花を未来の花としてメッセージを書き込んで花園のようにする試み。東大地震研の後藤先生によるデモのブースもあるが、実演はなかった。

10:10 黙とう

10:12 イトウタカヒロさん(宮城県気仙沼教育委員会)

10:20 泣き女による嘆き節。女性の中にわずかに泣く人もいる。

10:30 津波の孤児から知事へ感謝の記念品贈呈

10:36 州知事挨拶(宗教を超えよう、自分は政治犯として収容されており、収容所にいた270名のうち60名のみが生き残った。自分もその一人)。地震発生時は強力な武器が使われたとおもったほどだが、今後は和平を維持しよう。

10:57 男だけの合唱隊。体を揺らしながらラーイラーハイッラッラー(アッラーは唯一の神なり)を何度も繰り返す。一体感が徐々に高まる。うろうろしている人も多いが。

11:25 白装束の宗教指導者が20人ほどのおつきの人たちとともに登壇。州知事とあいさつ、合唱は続く。

11:32 宗教指導者による話。40代くらいの若手で鋭い目をする。しわがれ声。話は抑揚をつけ身振りを交えて話す。感情移入型。彼ひとりが立ったまた演説し、おつきのひとは彼の足もとに座って会場のほうに向いている。ジャカルタ出身だが奥さんがアチェの人。若手の宗教指導者の中の有望株とのこと。会場では彼の演説のCDを売る姿もあった。人気歌手のCDのよ

う。徐々に感情が高まる。津波にのみ込まれた人たちはアッラーの名前を叫んでいたに違いないという話の

ところで感極まり会場のあちこちから涙ぐむ人が続出。聴衆の気持ちを一気にまとめ、強烈な一体感を感じさせる。世界は我々とともにある。自分は世界の中にとともにある。世界はイスラムだけでよいとも感じた。なぜならそれが世界だから。イスラムに対する非難や攻撃は、確かに自分たちの全世界に対す

る非難や攻撃であると素直に感じられる、のは少しうがった見方に過ぎるか。

12:15 説法終了。12:45 出発。

15:00 近くの海辺のリゾートへ。青い海で泳ぐ。魚を焼いて食べる。その後、出発。

15:15 トルコ村。津波後、モスクのみが残された村。そのモスクの上に登り写真。

山沿いでチョウジ栽培にでかっていた人たちのみ助かった。

15:30 数百年前にトルコが上陸した場所。

15:45 TDMRC着。集団埋葬地へ。ここは無名の人たちが集団で埋葬されている場所。今日は7周年目の記念日。イスラムでは7に特に意味はない。埋葬地では1~3人ほどの10組程度が日陰に座りコーランを読む。比較的若い女性が子供用の埋葬地でコーランを読んでいる姿はちょっと悲しすぎる。

16:30 ホテル着。

夜はベチャで汁ソバ屋。亀山さん、深田監督、浜元さん親子とともに。

21:30 就寝

◆2011年12月27日(火)

アチェ発、メダン着 12:30

アチェからメダンに着くと、よく言えば活気があり、悪く言えば下品。Lion、Firefly、Asia.com、スラバヤエアなどあり。



宗教指導者(ウラマー)による説法。ウラマー右下に座るのは州知事



2005年1月のランブウ村(National Geographic日本版2012年2月号より)



ランブウ村モスク上からの風景(2011年12月26日)



セレモニーのあとにいった浜辺(ロンガ・ビーチ)



集団埋葬地。砂利道の右手が大人、左手が子ども



ランブウ・モスク前の土産物屋で販売していた津波Tシャツ



津波警報機

●アチェについて

- PMIで聞いたところによると、アチェ州は、2011年で6244村、人口448万人。
- アチェの現在の課題は、紛争からの復興、地震津波被害からの復興、復興がひと段落したため今後の経済の復興の三つの復興を実現することが課題。
- アチェ語：若い人も含めてアチェ語を理解する人がほとんど。プハバー（お元気ですか？）、ハバゲ（元気です）。ジャワ語では若い人が特に敬語を使えなくなっているのに対し、アチェではアチェ語がつかわれる。西さんによると、アチェの人は昔から数か国語を話すことができるという。マレー語とアチェ語のように。独立の時も公用語はマレー語（その後はインドネシア語）とすることですぐに同意できた。
- 1945年に公式には独立。しかししばらく占領が続く。1950年に実質的に世界に独立を認められる。
- ペンは剣より強し搭：独立時に建設。教育を重視した州の方向性を示す。
- 地方紙が4～5もある。FM局も複数あり。数年前から地方メディアが普及するようになった。
- アチェ語によるとAtjeh。特に70年代以前の古い綴り。現在はAcehが一般的だが、Atjehも見る。今回のワークショップのバナーに併記される。
- 津波警報機
- インドネシアについて
- 会議で話題提供の冒頭に発表者が「平和を（アッサ

ラームアライクム）」と問いかけ聴衆が「あなたにも（ワーライクムサラーム）」と返答する。電話でのやりとりのはじめにも使われるという。質疑応答でも使われていた。

- 黒の帽子はメッカにまだいっていない人、白の帽子はいったことのある人。
- 会議の開始時間が大幅に遅れたり、セレモニーの最中にうろうろしている人がいたりする。宗教や会議、行政の厳しい原理原則が存在する一方、ゆるやかな実践が行われている。そのミックスが面白い。

●その他

Terong Belanda(直訳するとオランダナス)のジュースあり。赤い汁でさっぱりとした甘さのジュース。アチェで多いという。

連絡先

Banda Aceh
Hermes Palace Hotel Banda Aceh
Jl. T Panglima Nyak Makam Street, Banda Aceh
+62-651-755-5888

TDMRC

Sri Adelila Sari
+62-87-xxx-xxxx